

第3章 栃木市の歴史文化の特性

1. 歴史文化の特性

本市は、北から西に谷倉山、太平山・岩船山・三義山などの山地と、中央から東部一帯に関東平野の北部にあたる平地が広がり、その中を巴波川と永野川が北から南へ流れ、南部で渡良瀬川と合流します。この豊かな自然と地形を利用し、原始から現代まで人の営みが続いています。

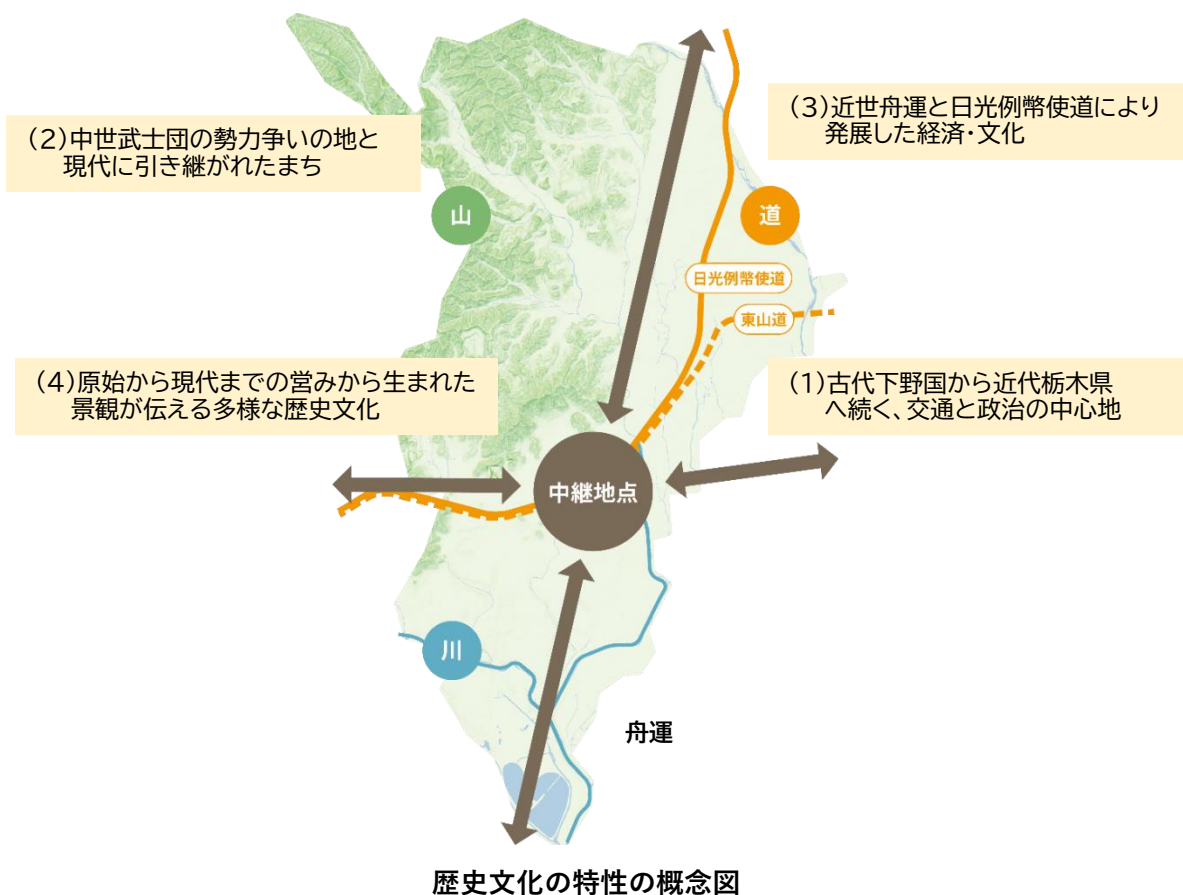
本市は、古代から現代まで、政治・経済・文化の中心である中央と他地域をつなぐ中継地点であり、また各時代の周辺地域との重要な交流地点でした。

このことは、市南部の渡良瀬川沿いに残る有数の縄文時代の遺跡、古墳、古代の下野国府跡、中世の城跡、近世の舟運と日光例幣使道による流通の跡、近代の県庁堀跡、そして各時代を通して現在まで残る生業や生業跡が示しており、本市の多様な歴史文化を表しています。

そして、この多様な歴史文化から生まれた景観や伝統文化を現在も各地域で見ることができ、住民が自らの歴史文化を大切に受け継いできたことの証と言えます。

本市の歴史文化の特性を整理すると、次のようにまとめることができます。

- (1) 古代下野国から近代栃木県へ続く、交通と政治の中心地
- (2) 中世武士団の勢力争いの地と現代に引き継がれたまち
- (3) 近世舟運と日光例幣使道により発展した経済・文化
- (4) 原始から現代までの営みから生まれた景観が伝える多様な歴史文化



(1)古代下野国から近代栃木県へ続く、交通と政治の中心地

本市は、古代は東山道、近世は日光例幣使道が通り、現在は高速道路や鉄道が交差する、関東平野北部の交通の要衝です。この高いアクセス性を背景に、古代下野国、近代栃木県の中心地として発展しました。

本市は、関東平野の最北部に位置し、北西部に山地、南部に渡良瀬川、東部に思川を擁する地理的条件から、古代以降、東西・南北の交通路が形成されてきました。その結果、中央と各地域を結ぶ交通の要衝としての役割を担ってきました。

古代に都と東北を結ぶ東山道が通り、近世に京都と日光東照宮を結ぶ日光例幣使道が整備されるなど、時代ごとに本市を經由する主要な交通路が発達しました。こうした交通網を背景に、本市は政治・経済・文化の中心地と地方をつなぐ結節点として機能してきました。

現代においても、首都圏から車や鉄道を利用して1時間程度でアクセスでき、東北縦貫自動車道や北関東自動車道、JR線・東武線などが市域を通り、周辺地域への高いアクセス性を有しています。

この交通上の優位性を背景に、本市は古代下野国の中心地として、また近代以降は栃木県の中心地として発展しました。



県庁掘りと旧栃木町役場(現文学館)

【古代と近代の地方政治の中心地】

古代において本市が下野国の政治の中心地だったことは、下野国庁跡の調査によって明らかになっており、国府に関する施設跡、寺院・神社、産業跡などが市域内に残っています。また、国庁以外の役所跡として、東山道沿いに設置された駅家と考えられる畳岡遺跡を確認しており、国府を支える交通・行政拠点の存在を示しています。

国府の機能を支えた産業遺跡は、三毳山麓窯跡群、大前製鉄遺跡群があり、これらは国府に生産品を供給していたと考えられています。三毳山周辺で採れる良質な粘土は、現代においても栃木県の伝統工芸品となっている「みかも焼」の原材料として使用されています。

また、政治の中心地であったことは宗教文化の形成にも大きな影響を与えました。大神神社、大前神社、村檜神社は、下野国府の国司が参詣した式内社であり、当時の役割は終えたものの、現在も氏子によって信仰と祭礼が継承されています。さらに、都とのつながりを通じて天台宗が伝えられ、大慈寺は天台宗第3代座主円仁が修行した寺として、古代から現代まで続く重要な寺院です。

近代になると、廃藩置県により本市に栃木県庁が置かれ、庁舎を中心に関連施設や、県庁を巡る堀・漕渠が整備されました。県庁が宇都宮市へ移転した後も、県庁跡地に栃木町役場・栃木市役所が置かれ、引き続き行政の中心地としての役割を担いました。現在、市役所は移転しましたが、堀に今も巴波川から水が引かれ、当時の姿をよく残しています。旧栃木町役場は文学館として生まれ変わり、堀や漕渠とともに、近代地方政治の中心地の歴史を伝える景観を形成しています。

(2)中世武士団の勢力争いの地と現代に引き継がれたまち

中世は、北関東の武士団と小田原北条氏らが戦った「沼尻の合戦」の舞台となるなど、本市は地理的に重要な位置にありました。城跡や城下の町割りが市域各所に残り、当時の戦乱の歴史が現代の町並みや景観に受け継がれています。

武士が台頭し、日本各地で勢力争いが繰り広げられていた中世、本市域は重要な戦いの舞台となりました。関東一円の支配をめぐり、小田原北条氏と北関東の領主連合が激突した沼尻の合戦は、日本統一の過程にも影響を与えた戦いとして有名です。この合戦が本市域で行われたことは、当時の政治・軍事情勢の中で、本市が地理的に極めて重要な位置にあったことを示しています。



皆川城跡（白鳥昇一氏提供）

中世を通して本市全域を統一した政権は成立しませんでした。当時有力な武士団の皆川氏も全域をくまなく領有するには至らず、複数の武士団が拮抗していました。そのため、各地に平城や山城が築かれ、城を中心としたまちづくりや防御を意識した町割りが行われました。

これらの城跡や町割りは現在も市内各所に残り、中世の武士団の活動と勢力争いの歴史が現代のまちの構造や景観のなかに受け継がれています。本市は、戦乱の歴史を内包しながら形成された都市の姿を今に伝える貴重な歴史文化を有しています。

【現代に引き継がれる中世のまち】

武士の台頭により、本市域で中世に複数の武士団が成立しました。本市域東部に小山氏、西部に小野寺氏が勢力をもち、各武士団が統治しました。

その後、小山氏や小野寺氏の衰退に伴い、皆川氏をはじめとする新たな武士団が登場し、国内の大勢力である小田原北条氏や豊臣氏、周辺の諸勢力との関係が目まぐるしく変化する中で、本市域はたびたび勢力争いの舞台となりました。その中で皆川氏は、戦国末期に現在の栃木市と同等の支配領域を有する勢力に成長しました。

こうした戦乱の歴史は、沼尻古戦場跡が残る藤岡地域をはじめ、榎本城・富田城などの平城跡、西方城・皆川城などの山城跡として、今も市内各地に残されています。さらに、城の築造とともに整備された町割りや水路は現在まで受け継がれており、皆川氏が築いた栃木城とその城下町は、近世から近代の栃木町、そして現代のまちの基盤となっています。

このように本市は、中世の武士団による統治と戦いの歴史が、現在の都市構造や景観の中に色濃く残るまちとしての特性を有しています。

(3)近世舟運と日光例幣使道により発展した経済・文化

江戸時代から舟運と日光例幣使道の要衝として栄えた本市は、問屋業が盛んになり、見世蔵などの歴史的建造物が良好に残り現在の町並みを形成しています。また、江戸文化の影響を受け発展した伝統行事が大切に継承されています。

本市は江戸時代、渡良瀬川・巴波川を利用した舟運と、京都と日光を結ぶ日光例幣使道が通過する交通の要衝として発展しました。これらの水運・陸運による物資流通を背景に問屋業が盛んとなり、商業都市としての基盤が築かれました。その繁栄は、現在も残る町割りや街道に面して建ち並ぶ見世蔵、木造店舗、土蔵などの歴史的建造物に表れています。



大通り沿いの五連蔵

昭和 50 年代以降、こうした歴史的建造物を活用したまちづくりが、住民と行政の連携により進められてきました。歴史文化と、それによって生み出される景観を大切にする住民の意識が「とちぎの蔵の町並み」として結実しています。

また、人と物の交流を通じて、文化面で主に江戸の影響を受け、祭礼や神社奉納の神楽・獅子舞などが各地域で育まれました。これらの行事は現在も伝統文化として継承されており、歴史文化を尊重する精神が地域に深く根付いています。

【江戸との流通で栄えたまちの現在】

江戸時代、栃木町は問屋業が集積し、日光例幣使道沿い約1kmの区間に、約250店舗が軒を連ねる商業のまちとして大いに栄えました。当時の町割りや建造物は、現在もまちの骨格として受け継がれています。特に嘉右衛門町は、歴史的建造物と町並みが良好に保存されており、住民と行政が連携した保存・活用の取組みにより、平成24(2012)年に栃木県で唯一の伝統的建造物群保存地区に選定されました。

また、廃業した問屋の建物は、新たな店舗や施設として活用が進められ、当時から営業を続ける店舗とともに、現在のまちの賑わいを生み出しています。

【江戸時代から継承される伝統文化】

江戸時代、問屋業で成功した栃木町の商人たちは、その経済力を背景に文化の担い手ともなりました。江戸の山王祭で用いられていた山車「^{さんとうさい}静御前」を倭町三丁目が購入したことを皮切りに、宇都宮の菊水祭で使われていた「^{きくすいさい}諫鼓鶏」を泉町が購入し、明治7(1874)年に県庁構内で行われた神武祭の祝賀行事で初めて山車の巡行が行われました。これを契機に、町内各地で次々と山車が制作されました。まちの発展を願い、祭典や祝典の度に華を添えてきた山車の巡行は、やがて現在の「とちぎ秋まつり」へと発展し、本市を代表する行事として、また住民の誇りとして今日まで継承されています。

また、市内各地域で、五穀豊穰や地域の安全などを祈願する祭礼が生まれ、それぞれの土地の特色をもって受け継がれました。巴波川の舟運の安全祈願として始まった百八灯流しは、舟運廃止後も地域住民により守り伝えられている、本市でも特色ある祭礼です。夏の風物詩としての側面も持ち、現在も重要な儀式として行われています。

さらに、各地域の神社祭礼で、神楽、獅子舞、杖術などが奉納されるようになり、氏子の手によって継承されました。これらの芸能は、市域内外にも知られる伝統文化となっており、江戸時代から続く「歴史文化を大切にする精神」が、今も地域に深く根付いていることを示しています。

(4)原始から現代までの営みから生まれた景観が伝える多様な歴史文化

豊かな自然に恵まれた本市は、古くから自然と地形を活かした生業が営まれてきました。その生業や伝統技術は、自然と人の営みが調和した多様な景観を生み出し、地域の歴史文化を今に伝えています。

本市は川・平地・山地の豊かな自然環境を有し、人びとはこの自然の恵みと地形を活かして、原始から今日に至るまで、生業を営み暮らしてきました。

生業の形は時代とともに変化し、失われたものもある一方で、遺跡や生業跡として残るもの、また伝統として受け継がれてきた産業や技術も存在しています。これらは、それぞれの時代の営みを今に伝えるとともに、本市に多様な景観を生み出しました。

こうして形成された景観は、自然と人の営みが調和しながら積み重ねられてきた結果であり、各時代の社会状況に応じて川・平地・山地を巧みに活用してきた本市の歴史文化を、現在に伝える重要な要素となっています。



渡良瀬遊水地の葦焼き

【川の利用と恵み】

市南部の渡良瀬川沿いは、縄文時代の篠山貝塚や藤岡神社遺跡が示すように、原始時代から漁撈を中心とした暮らしが営まれてきました。こうした川の恵みを活かした漁業は、形を変えながら昭和初期まで続き、地域の生活を支えました。また、この地域で採れるスゲを用いた菅笠づくりも行われ、自然資源を活用した生業の1つとして発展しました。

もともと湿地帯であったこの一帯は、渡良瀬遊水地の整備によって環境が整えられ、良質なヨシが生育するようになりました。これにより昭和初期からヨシズづくりが盛んとなり、現在も生業として継承されています。さらに、ヨシの健全な生育を目的として毎年行われる渡良瀬遊水地の葦焼きは、人の営みと自然管理が一体となった本市を象徴する文化的景観であり、川とともに生きてきた歴史文化を今に伝えています。

【平地の利用と恵み】

本市の平地は、古くから農業が営まれ、農産物は江戸との取引の主要な商品でした。なかでも、都賀地域・西方地域で生産されていた麻は、販売品として重要な役割を果たしました。

こうした農産物の流通を背景に、栃木地域で問屋業が発展し、巴波川沿いとその周辺に見世蔵をはじめとする歴史的建造物が立ち並ぶ町並みが形成されました。これらは現在も「とちぎの蔵の町並み」として残り、平地の生業と商業活動が生み出した景観を今に伝えています。

明治時代に二条大麦の栽培が盛んになると、平地の多くで稲作との二毛作が定着しました。春から初夏にかけて大平・藤岡地域に広がる麦畑は、「麦秋」と呼ばれる季節の景観として圧巻であり、収穫前の麦畑と田植え後の水田がパッチワーク状に広がる風景も、本市を特徴づけるものです。

さらに、太平山南麓で明治時代に始まったぶどう栽培が昭和前期から発展し、現在も「ぶどう団地」と呼ばれる一面のぶどう畑が広がっています。

【山の利用と恵み】

本市は、山地の資源を活用した生業が近代以降に発展しました。明治時代に、岩船山の採石と鍋山一帯での石灰採掘が盛んに行われ、地域の産業を支える重要な役割を果たしました。これらの資源を運搬するため、岩舟人車鉄道及び鍋山人車鉄道が敷設されました。前者は大正初期、後者は昭和中期に廃止されましたが、産業を支えた交通インフラとして、本市の近代化を象徴する歴史を今に伝えています。

現在も鍋山で石灰採掘が続けられており、山の恵みを活かした生業が継承されています。一方、岩船山の採石は現在、行われていませんが、切り立った岩肌を残す跡地は、JR 両毛線沿いから望むことがでける特徴的な景観となり、山の利用の歴史を象徴する存在となっています。